

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

Move この人に聞く

輝いて美しく

— 医の神アスクレピオスの娘たちよ! —

人生には「3つの坂」、上り坂、下り坂、そして「まさか」があると言われる。多くの女性医師はなにかに付け足しもの頃から「まさか女の子が…、まさか女の子が…」という洗礼を受け、大人になっても「まさか女性が…」と言われ続けてきた。

しかし、多くの医神の中にはなんと女神が多いことであろうか! 古代エジプトの最高の女神であるイシスや、雌ライオンの姿をし戦闘と疫病の神(悪霊をなだめる神)として恐れられたセクメトをはじめ、ギリシャには太陽神アポロンの双生児の妹であるアルテミスやゼウスの娘エイレイテュイアが、ローマではマトウタ、ディアナ、カルメンタがいずれもお産や子どもの守り神として敬われている。東洋においても痘瘡を治す痘瘡神として中国の麻娘娘やインドのシータラーなどの女神、日本では安産、子授け、子育ての神としての鬼子母神がいる。しかし、教会を中心とした中世以降医学界では女性には暗黒の時代が続いた。英国初の女性外科医 Dr. Barry はいつも男装し、その生涯を男性として送った。彼女は1812年にエンバラ大学を卒業後、軍医として勤務したが、死後に初めて女性であったことが判明している。女医を認めなかつた社会で苦難の生涯を孤独に送り、本名も判らないままであるという。

そして今日、時代はめぐり、stormyな過渡期を経て女性も男性も互に人間として尊重し合いながら、それぞれの己に合った生き方を求めることが可能となり、アスクレピオスの娘たちはスカートを翻し、メスさえも持てるようになった。最近の医師国家試験合格者は女性医師が35%と年ごとに上昇し、そう遠くない将来、女性医師4割時代が訪れると言われる。しかし、実際の医師の労働力率を年齢階級別にみると、女性医師はM字型を取る。すなわち20代後半から40代前半にかけては結婚・妊娠・出産・育児のため100%の医療活動ができず離職する医師が多い。このような現状に対して女性医師たちは以前から声を挙げていたが、無視され続けてきた。最近、「ママさん医師復帰手助け」「女性医師に優しい病院」「育児の壁が医師不足に拍車」「急がれる女性医師支援対策」などの新聞記事のタイトルにみるように、医師需給問題が起つたことで女性医師が注目されてきたことは皮肉なことであるが、やっと何とかしようという動きがでてきた。

しかし、そのend-pointはどこにあるのか、また方法などについては遅々として進んでいない。支援する側とされる側との想いに大きなずれがあるのも事実であり、両立支援は迷走している。保育所を作ったり、当直を免除する前に、心して欲しいことは、男性は常にフェアであること、すなわちチャンスもフェアに与え、そして評価もフェアにして欲しい。一方、女性医師には、医師であることを喜び、断固たる意思を持つこと、そしてその時、その時の自分のpriorityを決めて欲しいと思う。人間が一度にできることには限度があり、今、自分にとって何が一番大切なかを常に考えてほしい。幸い医師は一生勉強することが出来る。意思さえあれば育児中でも勉強はできる。常に勉強して医師であることに誇りと夢を持ち続け、いつも輝いていて欲しい。



CONTENTS

Move この人に聞く	1P
Books ジェンダー最・前・線	2, 3P
Information	4P



九州大学病院長

水田 祥代
(すいた さちよ)

未来・ことば

ジェンダーは名詞ではなく、…パフォーマティブなものである。

つまり、そういうふうに語られたアイデンティティを構築していくものである。

この意味でジェンダーはつねに「おこなうこと」であるが、しかしその行為のまえに存在すると考えられる主体によっておこなわれるものではない。

ジュディス・バトラー

カリifornニア大学バークレー校教授

『ジェンダー・トラブル—アイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、1999年
(Judith Butler. *Gender Trouble*, Routledge, 1999, p.33) より

Books ジェンダー最・前・線



■ Barbara J. Love 編
■ University of Illinois Press
■ 2006年 初版

Feminists Who Changed America, 1963-1975

(仮邦題『アメリカを変えたフェミニストたち—1963年から1975年まで』)

2006年2月、アメリカ女性史において、後生に語り継がれるであろうひとりの女性がこの世を去った。1960年代に、女性たちが漠然と抱える「名前のない問題」を明らかにしたペティ・フリーダンの功績は、第二派フェミニズム運動を牽引してきた点にあるだろう。彼女が亡くなった直後、「語られてこなかったこと」に声を与えた第二派フェミニズム運動に関する、500頁を超える浩瀚なレファレンス資料『アメリカを変えたフェミニストたち』が出版された。

本書には、60年代から70年代にかけて様々な形でフェミニズム運動を支えた、2,200人にも上るフェミニストたちの短くも的確なバイオグラフィーが収録されており、彼らたちの活動の多様性を私たちに伝えている。本書の一冊の特徴は、本書のほとんどの項目の末尾に、ABS (Approved by Subject)という、本人の承諾を得ている旨が記されていることだろう。パーソナル・ヒストリーを重視し、個人が持つ視点を重んじる本

書の編集姿勢は、個人の問題は政治問題なのだという第二派フェミニズムの主張と相通じる。フリーダンの項目には、ABS before deathと、亡くなる前に本人によって承諾を得たライフ・ヒストリーであることが、明記されている。

第二派フェミニズム

1960年代に始まったフェミニズム運動を指す。19世紀半ばに起こった第一派フェミニズム運動が参政権獲得などの法的な男女平等を求めたのに対し、第二派フェミニズムは、法整備に加えて社会的な様々な制度における男女平等を求める運動と位置づけることができる。コンシャスネス・レイジングと呼ばれる意識高揚運動を始め、「個人的なことは政治的なこと」を突破口にした第二派フェミニズムからは、多様なフェミニズム理論が生まれた。

おおじ ひさよ
大串 尚代 (慶應義塾大学助教授)

Acting 'Otherwise': The Institutionalization of Women's/Gender Studies in Taiwan's Universities

(仮邦題『[異端として]行動して—台湾の大学における女性学・ジェンダー研究の制度化』)

台湾の大学に女性学／ジェンダー研究が取り入れられるようになったのは、2000年に入ってからのことである。本書第一部は、90年代台湾の大学において女性研究者はいかに周縁化され、また女性学／ジェンダー研究はいかに学問として認められていなかっかを論じている。

第2部は、女性学／ジェンダー研究はどのようにして大学のなかに制度化されていたかそのプロセスを明らかにしている。そして、この変革の大きな原動力となったのは、女性自身の意識の目覚めとフェミニストとしてのアイデンティティの形成にあったという。台湾のフェミニズムの先駆者たちは、80年代後半から90年代にかけて、大学内をリベラルな環境にする一方、他の大学のフェミニストたちと連携しながら、女性学／ジェンダー研究を学問として制度化するために力を結集し、さまざまな方策を取りながら女子学生や大学教員をエンパワーしてきた。その成果がアカデミズムにおける女性学／ジェンダー研究の認知となって結実し、2000年以降には大学学部内に女性学／ジェンダー研究所が設立されていった。

他方で、Yushan大学とFormosa大学の事例研究は、イン

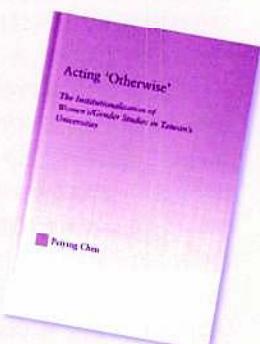
タビュー調査による表層的な情報をもとに両大学の女性学／ジェンダー研究所設立の経緯を誤解した分析であるとの批判が両大学の教員から起きた。しかしそれでもなお、膨大な資料をもとに台湾における女性学／ジェンダー研究が制度化されるプロセスを実証した本書は、価値が高い。

女性学・ジェンダー研究の制度化

女性学／ジェンダー研究が台湾の大学において制度化されるに至っては、草の根レベルのフェミニズム運動の影響が大きいことは言うまでもない。しかし今や、二者は緊張関係にある。中産階級化した大学の女性学／ジェンダー研究が創出する知識は、専門用語の差異化と精緻化というアカデミズムのポリティクスの罠に陥り、多くの女性たちがさまざまな権利を奪われたまま日々緊急な問題に直面している現実に目を向けていないと、草の根フェミニストたちは象牙の塔のフェミニストたちへ警告を発している。フェミニスト研究の地平を広げていくには女性労働の現実に立ち向かわなければならない。そうしなければ、女性学／ジェンダー研究は本来の批評眼と活力を失うであろう。

Ling-fang Cheng (Kaohsiung Medical University 教授・ジェンダー研究所所長)

(翻訳:力武由美)



■ Peiying Chen 著
■ Routledge Falmer
■ 2004年 初版

フィリピン—日本国際結婚—多文化共生と移住

グローバリゼーションは結婚事情にも大きな影響を及ぼしている。2005年の調べによると、日本人の結婚の15組に1組が国際結婚で、日本人夫と外国人妻という組み合わせが最も多い。フィリピン人妻は中国人のつぎに人数が多い。その背景には、フィリピンと先進国との間に南北問題的構造がある。

本書では、フィリピン人女性の出稼ぎ事情を踏まえたうえで、エンターテイナーから日本人妻となった女性、斡旋業者の仲介によって農村へ嫁いだ女性たちが、そのような偏見に対して抗議活動をしたり、フィリピン文化の紹介活動をしたり、あるいはまた情愛深い家庭生活を営むなど、これまで語られてこなかったフィリピン女性の姿を紹介することで、性産業で働く陽気でしたたかな「ジャバゆき」、家を守る従順な「農村花嫁」といった固定的なイメージを打ち砕いている。

また、フィリピン人妻のみならず日本への移住女性が教育や職歴を生かせず、「現場労働」を強いられていることや多文化共生の難しさなど共通して抱えている問題が提示され、その根底には女性であることと加え外国人であることで被る

二重差別の現実が指摘されている。フィリピン人妻と日本人夫との二つの立場から現実を浮き彫りにし、ジェンダー／民族／階級の視座に立った多文化共生社会のあり方に示唆を与えた興味深い一冊である。

メール・オーダー・ブライド

「郵便による花嫁注文(=結婚紹介)」の意味で、斡旋業者の仲介によるものから、カタログ・新聞雑誌広告を通しての斡旋、友人や親類による紹介などを含む。仕組としては、斡旋業者が先進国の男性に途上国の女性のリストを見せて選ばせ、女性の国の斡旋事務所に発注後、男性が現地を訪ね女性と会い、結婚申込を済ませ帰国し、女性の入国を待つ、というのが一般的である。結婚後、男性は女性が気に入らないと暴力を振るい、離婚し、また別の女性を注文する「シリアル・マリッジ」(連続結婚)に至るケースも多く、メール・オーダー・ブライドは女性の人権を無視した国際的人身売買だとして、1990年にはフィリピン共和国法6955号が制定され、現在では法規制下に置かれている。

(Saihanjuna)
賽漢 卓娜 (名古屋女子大学非常勤講師)



■ 佐竹真明 著
メアリー・アンジェリン・ダノイ
■ めこん
■ 2006年 初版
■ 2,500円(税別)



トランスジェンダー・フェミニズム

著者の田中さんは、FTMTGのトランスジェンダーである。つまり、女性(F=フィーメイル)から男性(M=メイル)へと(T=to)、トランスジェンダーした(TG=性別を越境した)人ということだ。

彼は、「女」としての自分に違和感をもっていたから、ジェンダーを越境した。つまり、「女」から「男」になったのである。でも、「男」になるといつても、既存の「男らしさ」にこだわっているわけではない。「女」「男」という固定された性別の二元論を越えた生き方をこそ、彼は求めているからだ。

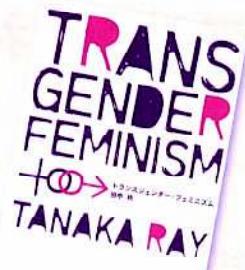
その意味で、タイトルになっている「トランスジェンダー・フェミニズム」とは、「性による差別や偏見を克服し、社会的性別を越境する思想」とまとめることができるだろう。田中さんには、現在、同じFTMTGでゲイ(これもちょっと想いがけない言い方かもしれない)のアメリカ人のパートナーがいる。このパートナーとの開かれた関係や、ご自身が体験された重病と入院体験、ご自分の家族との関係やパートナーのご両親とのアメ

リカでの出会いなどなど、個人的体験も大変興味深い。また、用語解説なども充実しており、ジェンダーやセクシュアリティについていろいろなことを教えてくれる1冊だ。

トランスジェンダー

社会的に構築された性別であるジェンダーをトランス(越境)する生き方を選んだ人たち、つまり、性別越境者を意味する言葉である。男性から女性へと越境する人をMTFTG(エム・ティー・エフ・トランスジェンダー)、女性から男性へのそれをFTMTG(エフ・ティー・エム・トランスジェンダー)と呼ぶ。異性の装いを好むトランスヴェースティ(異性装着者)、ホルモン注射や手術をしない人(ノンホル／ノンオペ)から性ホルモンの投与や性器変更の手術を行なうトランスセクシュアル(性転換者)まで、多様な形態が存在している。

いとう さみお
伊藤 公雄 (京都大学大学院教授)



- 田中 玲 著
- インパクト出版会
- 2006年 初版
- 1,600円(税別)

東北大学21世紀COEプログラム ジェンダー法・政策研究叢書[辻村みよ子監修] セクシュアリティ法

法とは、人が社会生活を営む上での他者との関係を律する公的領域のルールを定めたものである。セクシュアリティは元来「私的領域」の面が強く、法規制の対象とはなりにくかった。その結果、買売春の蔓延、妻への暴力の放置など(女性である)個人の尊厳が侵されてきた。本書は、性と生殖、性と暴力という2つの視点からセクシュアリティに関する法律の現状、限界、そして問題点を紹介・検討している。

性と生殖に関する章は、解決困難な問題を指摘する。人工中絶をめぐる胎児の生命の権利と母親の産まない自由(権利)との対立。ポルノグラフィをめぐっては性的差別行為によって侵害される女性の権利と表現の自由との対立。性的自己決定権は買売春の根拠となりえてしまうのではないかといった議論、など。

性と暴力に関する章では、性暴力・性犯罪に関する法律の問題点・限界を指摘する。強姦罪が性的自己決定権に対する犯罪であれば、「暴行脅迫」を手段としない姦淫も強姦罪となるのではないか。DVに警察は積極的に介入すべきか。日本の性犯罪被害者対策はスウェーデンなど外国と比較し

て不十分ではないか、など。ITなど様々な科学技術の発展とは裏腹に未だジェンダーバイアスが掛かった社会の存在を思い知らされる。「女性の人権」論が高まりだしてから10年余り。継続的な運動と議論の蓄積こそが、女性の権利を「人権」たらしめるために必要であり、近道だと感じさせてくれる本である。

子どもを持つ権利

フランスで1994年に成立した生命倫理法を契機に子どもを持つ権利、特に人工生殖技術に助けを求める権利が認められるのかという議論がされるようになった。子どもを持たない自由が認められる流れから子どもを持つ自由が主張されるのは当然とする意見、子どもを望むのは切なる強い望みではあるが権利たり得ないという意見。主体は女性かカップルか。性と生殖に関する自己決定権から人工生殖技術を利用するかどうかの選択権は権利たり得のではないか。問題は憲法だけでなく民法(家族法)にまで及ぶ。少子化や女性の高齢出産の増加などから、日本でも不妊治療の必要性は高く、今後議論されるべきテーマである。

おぐら ともこ
小倉 知子(弁護士)

新刊・新着本紹介



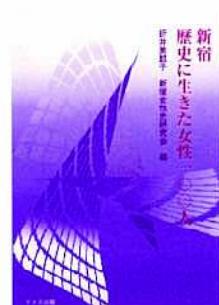
アムネスティ・リポート 世界の人権 2006

- 「アムネスティ・リポート 世界の人権」編集部 編
- (社)アムネスティインターナショナル日本
- 2006年 初版
- 3,000円(税別)



韓国の軍事文化と ジェンダー

- 権仁淑 著
- 山下 英愛 訳
- 御茶の水書房
- 2006年 初版
- 2,800円(税別)



新宿 歴史に生きた女性100人

- 折井 美耶子 新宿女性史研究会 編
- ドレス出版
- 2005年 初版
- 2,000円(税別)



地域で子育て 地域全体で子育て家庭を支えるために

- 渡辺 順一郎 編著
- 小林智子 著
- 有村 大作 著
- 松田 美穂 共著

- 川島書店
- 2006年 初版
- 1,571円(税別)



セックス・チェンジス トランスジェンダーの政治学

- パトリック・カリファイ 他著
- 竹村 和子 解説
- 石倉由・吉池 祥子 他訳
- 作品社
- 2005年 初版
- 3,600円(税別)



ジェンダー・エッセー

アジアのネットワーク形成に求められるもの

トヨタ財団 ネットワーク形成プログラム アシスタント・プログラム・オフィサー

権 修珍 (Kwon Sujin)



トヨタ財団は、トヨタ自動車が創業40年を機に、人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して、1974年に設立した助成財団である。トヨタ自動車は、「自動車を通して豊かな社会づくり」を行うことを基本理念として、社会の恩恵のもとに社会を努めるとともに、幅広い社会協力にも努めてきた。この基本理念の下に、現在、トヨタ財団では、「ネットワーク形成プログラム」「地域社会プログラム」「研究助成プログラム」の3つの助成プログラムを運営している。

そのうち、筆者が担当している「ネットワーク形成プログラム」に関して紹介したい。このプログラムの中に「アジア隣人ネットワークプログラム」がある。「『人ととのつながり』がアジアの可能性をひらく」を基本テーマに、アジアに生きる人々がお互いの個性、特性を認め合いながら(多元性)、知恵を出し合って(相補性)、国際社会とアジアという視点に立って共生していく(協働性)ことに取り組むためのプロジェクトである。特に、その企画段階や実施段階で「人と人とを複合的に繋げていくプロセス」を支援している。

具体的には、2006年度の「ネットワーク形成プログラム」の応募状況にみられるように(応募総数189件のうち31件を採用)、採用テーマは、環境、文化・アート、農業、社会問題、ジェンダー、町づくりなど実に多様で、研究者、実務家、活動家による、国境を跨いだ出会い、対話、協働のための様々な活動を対象としている。応募の主体は、研究者、実務家、活動家(NGO/NPO関係者など)のいずれでもかまわない。21世紀はある課題を解決するためには、一国だけあるいは研究者だけといった閉じられた構成員で取り組んでいては解決できないほど問題が複雑かつ多岐にわたっているからである。このような時代だからこそ、課題解決に向けてのネットワーク形成は重要な方策なのである。また、ネットワーク形成が多様で学際的であればあるほどそのダイナミクスから多様なアジアの凝集力と求心力が生まれるのである。

筆者の仕事は、採用されたプロジェクトがどのように運営されているのか、またどのようなネットワークを展開し深化させているのかといった観点から、見守り、援助していくことである。そのため、たとえばワークショップを開催となれば、会場に直接赴き、主催者や参加者との対話をとおして、プロジェクトの成果や方向性を共に探っていく。また、プログラムを成熟させるために特定課題を設けたり、助成対象者による合同成果報告会を開催したりする。これによって、助成対象者同士はもちろん、トヨタ財団自体のネットワークも広がっていく。

それでは、このプログラムの性格、言い換えるなら、アジアのネットワーク形成に求められているものは何であろうか。その点を明確にするために、2006年度採用のプロジェクトからひとつ紹介したい。それは、マレーシアの社会経済学者であるワジールJ.K.氏によるプロジェクト「女性移住労働者

の自立に向けたASEARA-ASPAC(Academy for Socio-Economic Research and Analysis-Asia Pacific)ネットワーク」で、学際的視点と学際的アプローチを取っている。このプロジェクトでは、女性移住労働者がネットワークを形成していくことで、女性であるがゆえにかかる労働、移動におけるジェンダー問題、女性移住労働者を取り巻く家族、コミュニティの断絶、人的資本、片親、労働の搾取などの問題を複合的に明らかにした豊富なデータベースを産み出すことができる。さらに、それらの問題を解決するために、世界規模での女性雇用促進のための法制度の整備及び普及ならびに貧困撲滅に向けたジェンダー視点を取り入れた政策提言することで、公正かつ公平な方法に基づいた労働市場の発展に向け、政府や研究者の関心と支援を産み出すことが期待できる。これらの成果は国境を越えたネットワークを形成しているからこそ実現できるものである。

つまり、ネットワーク形成に求められているものは、アジアの隣人たちが多様で学際的なネットワーク形成をしながら草の根の問題を共有・明確化し、問題解決に向けての政策提言を行うことで政府や専門家の関心や支援を獲得ながら政策決定過程に影響を及ぼしていくことである。それこそが、トヨタ自動車そしてトヨタ財団の基本理念である「人間のより一層の幸せを目指した福祉社会の形成」につながっていくのである。もちろん、ネットワークを形成していく過程では、アジアの言語と文化の多様性や歴史的背景あるいは政治経済体制の違いゆえにトラブルも生じるであろう。そのような中でも、アジアの多様性を尊重する姿勢、ネットワークの重要さを認識する力、共通の課題意識を持ちながら解決に向けて取り組んでいく根気が、プロジェクトを成功させる上で不可欠である。ASEARA-ASPACネットワークが2006年12月マレーシアで第1回目のワークショップを開催したので、開催地に行ってみた。プロジェクト参加国はインドネシア、マレーシア、韓国、日本、フィリピンである。それぞれの国における女性移住労働者の現状と課題が報告され、問題解決のためにはどのような方策があるか、またワークショップで得た成果を国の政策に反映させるためにはどうしたらよいのかといった点が討論された。この2年間のプロジェクトは始まったばかりである。ネットワーク形成の成熟と深化そしてそのパワーの成果を見守っていきたい。

2007年度の「ネットワーク形成プログラム」は日本以外のアジアからの応募を増やすことを目指し、2007年3月に東南アジア(タイ・インドネシア・マレーシア)及び東アジア(韓国)で公募説明会を開催することを企画し、進行中である。平等・開発・平和に向けた活力ある持続可能な国際社会を形成していく上で意義ある課題をアジアの人々が一緒になって取り上げ、相互にネットワークを形成し、応募することを期待している。応募期間は、2007年4月1日(日)より5月20日(日)までである。

※詳細は、www.toyotafound.or.jp を参照されたい。

Cutting-Edge 第25号

【編集・発行】 発 行 日 2007年1月20日

発 行 者 羽瀬川順子

編集協力 女性学・ジェンダー研究ネットワーク

編 集 力武由美

発 行 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”

印 刷 (株)エディックス

※本誌は再生紙を利用しています。

北九州市立
男女共同参画センター

ムーブ

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107
ホームページ http://www.kix.or.jp/move_we
E-Mail move@move-kitakyu.jp